
Their Nightmares (更新停止)

糸川しなの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Their Nightmares (更新停止)

【Nコード】

N1482D

【作者名】

糸川しなの

【あらすじ】

その悪夢は、誰の物か。その歴史は、誰の物か。破滅の連鎖は止まらず、双子の少女が地球儀を廻す。謎めいた真実の断片を紡ぐ物語。

第0の歴史：誘（いざな）い（前書き）

この物語は主人公が誰なのか明確には示されていません。

この物語は時系列がどのように繋がっているのか明確には示されていません。

全てはあなたの手で探り出してください。

第0の歴史：誘（いざな）い

その子供は美しかった。

透き通るようなその瞳は、彼らを恋の地獄に落とし込んだ。

小さな身体に不釣合なその色香は、彼らを葡萄酒の如く酔わせた。

誰もが身悶える炎に焼かれ、そして妬き、子供を己の腕の中に求めた。

知っているのか、それとも全く知らずにしているのか、子供は娼婦の如く彼らを翻弄した。

或る者は妻を売った。

或る者は己を殺した。

破滅の連鎖は気付かぬうちにあらゆる場所へ繋がっていく。

神は、終幕ベルを誰にも押させない。

永遠に叶う事無き彼らの欲望。

なぜならその子供は

「それは彼らの愛憎を廻るミステリ」

「それは彼らの人生を廻る年代記」

双子の少女が、地球儀を廻す。

真つ赤な口紅の塗られた小さな唇が動く。

古びた空気を震わせて、全く同じ声が聞こえる。

「あなたはあの子の姿を見つける事ができるかしら」

「あなたはあの子の名前を知る事ができるかしら」

両側に置かれた赤と白の地球儀が回転を止める。
所々に穴の開いた二つの地球儀は、持ち上げられて
小さな腕に収まった。

目の痛くなるような赤と、消え入りそうな白。

青白い顔の少女達は、口を揃えてこう言った。

「Welcome to the」
「Their Nightmares」

第1の歴史：少女達の話

「子供たちの集まる広場」

「或る少女達に声を掛けるくたびれた背広の男」

双子の少女は地球儀に腰掛ける。

アーチエの事件について聞きたい？

いいわよ。ちょうど私達もその事について話してたところだから。でもタダじゃだめ…一人ずつ何か奢ってちょうだいな。ふふふつ。やっぱりそうよね。

ええ、全くだわ。

おじさん、私達をイーストカフェに連れてって。

話はそこでもしましょう？

そうしましょう！

アーチエの事は本当に可哀想だと思う。

だっておばさんが殺されて、しかもその犯人がああの優しそうなおじさんだなんて。

アーチエはおじさんを慕っていたけど、おじさんはアーチエが嫌いだったのかもね。

ええ？どうして。

だってこの前私とメルシーがアーチエの家の前を通りかかった時、凄く大きな声でアーチエを叱ってるおじさんの声が聞こえたもの。しかも「俺の部屋を勝手に見るな！」って叫んでたのよ？

子供に向かってそんな事を怒ると思う？

思わない。

でしょ？だからきつとおじさんはアーチエを殺そうとしたのよ！

ああ、そっか！

でもおばさんがアーチエをかばった？

そうそう。きつとそういう事なのよ。

かわいそうなおばさん。かわいそうなアーチエ。

本当にそうだわ。

でも、アーチエはどこへ行ってしまったのかしら。

貴重なお話をありがとう、お嬢さん達。

ええ。さよなら、おじさん。

美味しいデザートをごちそうさま。

また奢ってくださいね！

ああ…それはちょっと勘弁してくれるかい？

第2の歴史：寝台

「二人きり、寝台トレックの上」

「別れの夜は星すら息を潜める」

右側の少女が、赤い地球儀を廻す。

秋の肌寒い夜に、息子は生まれた。

母親の私が言っても説得力はないけれど、とつても可愛い子だった。本当にどうして男の子として生まれてきたのだらうと思うくらい。

ああ、可愛い我が息子。

どうか一生私の胸の中に、私の腕の中に、私の胎はらの中に。

「お母さん？」

はっとして瞬きをすると、現実に引き戻される。

ここは…私の寝室だ。

そして、私の腕の中にはまだ、アーチエがいる。

私は安堵する。

逃がさないように強く抱き締める。

壊さないように優しく抱き締める。

泣かないように強く顔を引き締める。

「どうしたの？」

あどけない笑顔が私の心臓を貫く。

あなたは、私を怨んでいる？それとも愛している？

解っているのかしら、私の罪を。

「ごめんね」

囁くように言うと、アーチエは首をかしげる。

それは普通の子供の仕草だけれど、私にはそれさえもが罪を暴き立てる新聞記者のように思えてしまう。

「どうして泣くの？」

「怖いからよ」

「何が怖いのか？」

私は震えた。

「お前が…怖いんだよ」

愛してしまった罪。

裏切ってしまった罪。

全てが許されるのなら、私はもう何もいらぬ。

ごめんなさい、。

ごめんなさい、。

ごめんなさい、。

ごめんなさい。

私は最期の接吻^{キス}を彼にする。

第3の歴史：永遠の人

「恍惚とした表情の浮浪者」

「怯えた表情の浮浪者」

左側の少女が、白い地球儀を廻す。

ああ、そりゃあ美しい人だったよ。

今思い出しても寒気がするね。

あの美しい人を、このしがない浮浪者の俺が手に入れることが出来たなんて。

初めて会った瞬間にピンと来たよ。

“この人が俺の運命の人だ”なんてね。

笑っちゃうだろうか？どこのB級映画だよ、ってな。

でも俺は本気だった。本気だったさ！

俺はすぐにあの人の後を追った。

…何故かって？

そりゃあお前さん、こんな格好の人間がいきなり話しかけても避けられるだけだろう？

だからまずはあの人の家を調べて、身なりを整えてから待ち伏せて告白しようと思ったのさ。

ところが、だ。

あの人はどんだん市街地から離れていく。

星が瞬き始める頃に辿り着いたのは、山奥の小さな廃屋さ。

たまげたね。あの人もまた、帰る家がなかったんだよ。

確かにあの人の格好は薄汚れたロングコートだった。

だが、その顔は凜とした気高さを持っていた。

そこに俺は惹かれたんだろうな。

俺は妙に親近感を覚えて、思わず話しかけたよ。

こんばんは、夜は寒いですね。とか言ったような気がするな。

あの時はまるで王様の御前にいるみたいに緊張して、まるで機械みたいな口調だったよ。はっはっは。

でもな、見ず知らずの怪しげな男に、あの人は微笑んでくれたんだ。俺はもう死んでもいいと思ったね。

それからあの人は俺を小屋の中に入れてくれた。

外は寒いでしょう、汚い家ですがどうぞあがってください…ってね。

俺は篤く礼を言って中に入ったんだ。

廃屋の中は、あの人の匂いに包まれていたよ。

俺はむくむくと湧きあがってくるあの感情を精一杯押し込めた。

破裂したら最後、俺はどうにかなってしまっからな。

あの人は俺にお茶を淹れてくれて、自分はお湯を飲んだ。

その心遣いに俺は泣きそうになったよ。

男として情けない、って思った。でも俺はそんな事は言えなかった。ただお互いぼつぼつと色んな話をして、時を過ごした。

でもな。

急にあの人の笑顔が、痛々しいものに思えたんだ。

きつとあの人は、もとは良家の出だったんじゃないかと思う。

ちよつとした仕草に、どこか気品を漂わせていた。

それがまさか、まさかお湯を飲んで寒さをしのぐなんていう生活が待っているとは、夢にも思わなかっただろうよ。

せめて客人にだけは自分の貧しさを感じて欲しくない。そんな気持ちで俺にお茶を入れてくれたんだろう。

気丈な振る舞いが、その笑顔が俺の心を締め付けた。

俺はいたたまれなくなつて、そろそろ帰りますと言つたんだ。するとあの人はとても悲しい顔をした。

「もう、帰つてしまふんですか…？ やつと友達を見つけれたと思つたのに…」

良心と恋心の天秤が、釣り合いをなくした瞬間だった。

俺はあの人の痩せた肩を掴むと、腐りかけた床に押し倒した。

あの人は驚いて目を見開いたけれど、俺はそんな事は気にしなかった。

「俺は友達になりに来た訳じゃないんだよ！」

俺の頭はもう真っ白になつて、無我夢中であの人を求めた。

でもあの人は強い力で俺を振り払つて外へ逃げた。

そしてどんどん山奥へと走っていく。

俺は追い、あの人は逃げた。

それが何時間続いただろうか、あの人は急に足を止めた。

あの人の目の前には崖があり、そして轟々と音を立てて流れる滝が広がっている。

俺は喜びを隠せなかった。

もうあの人は逃げられない。

あの人は俺の物だ！

俺はあの人にのしかかると、無我夢中で愛を求めた。

あの人は苦しそうに俺の腕を振り解こうとするが、それもだんだん力を失くしていった。

瞳は大きく見開かれ、瞬きもせず俺の姿をただじっと見つめていた。

気付けば夜明けだった。

俺の腹の下にはあの人がいたけれど、マネキンのように動かない。首には紫色になった手の跡がついている。

俺は恐ろしくなった。

悲鳴をあげてあの人を滝に落とした。

あの方は無表情のまま、青い水底へと沈んでいった。

それからあの人がどうなったかは、知らないね。

もしかしたら流れに乗ってどこかへ行ってしまったのかもしれないな。

でもな、時々思うんだよ。

あの方は俺が逃げ出した後、また平然として水中から浮き上がってあの廃屋に帰っていったんじゃないかって。

はは、刑事さん。

俺が妄言を言ってるって思っただろ？

俺もそう思う。

…だがよ。

最近、四六時中刺すような冷たい視線を感じるんだ。

一度だけその視線の主の顔を見ることが出来たんだが、な。

その顔は、あの人にそっくりだったんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482d/>

Their Nightmares（更新停止）

2011年10月4日15時22分発行